

35. 田中 亮一郎氏 (第一交通産業株式会社 代表取締役社長)



**「住んでいてホッとできる、
人にやさしいまちになってほしい。」**

田中 亮一郎 (たなか りょういちろう)

青山学院大学卒業後、82年全国朝日放送(現テレビ朝日)入社。85年第一交通産業社外取締役に就任。01年より現職。全国ハイヤー・タクシー連合会副会長・地域交通委員長として公共交通空白地域の解消を推進。ほか、福岡県タクシー協会名誉会長、北九州タクシー協会会長、福岡経済同友会副代表幹事、北九州商工会議所副会頭などを務める。

「各区の特徴を生かしたまちづくりを」

五市対等合併以降、1つにしようという意識が強いていると感じていますが、それぞれ歴史があるまちですから、無理にまとめなくても良いのではないのでしょうか。不動産事業をしても、若松に住みたい人もいるし、門司や小倉が好きな人もいます。それぞれの良い所や、核をつくっていくのが良いと思います。

「働き手の確保と働く場の充実を」

日本の若者の人口が少なくなる中、北九州市には、10の4年制大学があって毎年2000人以上の新しい学生が入ってきます。少なくとも2～4年は居ますし、このようなところは地方ではほとんどありません。彼らにいかに残ってもらえるかが重要です。働き口の確保の面でも、工場誘致をしなればどうにもならないという他都市に比べれば、九州2番目の人口規模を誇る都市であり、捨てたものではないと思っています。

一方で、北九州市から転勤した人は北九州市に戻りたがるという特徴があります。加えて、これから増える65歳以上の元気な高齢者も働ける場所が必要です。また、その中でコミュニケーションがしっかりとれる場を提供することも重要でしょう。

「住む人たちが嬉しくなるまちを」

商工会議所の副会頭を務めていますが、中心市街地の活性化のための会議に出ると、メンバーからは「北九州市は、まだまだ大丈夫、九州で2番目に人口の多い都市だ」という気持ちが伝わってきます。この強さはポテンシャルだと思いますので、うまく活用して商店街の活性化にも取り組んでいけば良いのではないのでしょうか。安易な再開発で高層ビルを建てることは建設費や賃貸料が高くなり、地元の人たちが住みづらい場所になるという可能性があります。最近、東京では大型スーパーが縮小し始めており、反対に商店街が活性化しています。土地が高いので、大きな開発がしづらいからというのも要因です。その中で、地域の特色としてお祭りもやっているようです。

したがって、規模で大きくなるというよりは、小倉の商店街を生かしていく、他のものに変化させていくという方向で、今あるものを再生しながら徐々に変わっていくという方向性が良いと考えます。

かっこいいまちでなくとも、住んでいる人たちが嬉しいまちをどうつくるかが重要です。

コロナ禍の3年間に、IT、DXで働き方も変わってきています。会社は中心地にあっても住宅は近郊にあり、近郊の商店街に行く機会が増えているように感じます。商業施設の周り

に住宅があるというよりは、住宅の近くで簡単な買い物をできるようにしていくと良いのではないのでしょうか。

「まち歩きができるような交通を」

交通では、ラストワンマイルの移動を高齢化に向けて考えなければなりません。福岡市では実証で校区別のおでかけ交通を始めています。区の単位で行ったアンケートではニーズは無かったのですが、校区や町内会などより細かいレベルで聞くと、ニーズがあることが分かりました。

北九州市でも門司や若松などで移動手段の整備をしていくことが重要ではないでしょうか。そのようなデザインをしないと、回遊性を高めることはできません。

郊外にビルを建てて、ショッピングモールを作ると、車の運転が必要になります。したがって市街地の商店街で日用品が手に入る仕組みを構築するために、我々もまち歩きができるような交通をつくっていきたいと思っています。

当社では、全国約300か所で「おでかけ交通」を実施していますが、これまで止めた地域はありません。ドライバー人口減少による人手不足、高齢化の中でも、人の移動は無くなりません。しかし、広く居住エリアが分散されると困るので、居住エリアを誘導していくことが必要です。立地適正化計画もありますが、反発がある中でそれらをどのように整備し、住んでいて良かったと言われるまちにできるかが重要でしょう。

「エネルギー自給システムを次の産業に」

北九州市には、工業、農業、水産業、洋上風力も含め、世界的にも力のある企業があります。九州は自動車産業で栄えてきましたが、燃料電池車も出てきて、水素への移行など、市としてどう考えるかが重要です。行政が変われば、まちの状況も変わると思います。

「環境未来都市」など環境面では、成功させ

てきているので、新しい産業にソフトランディングさせるかどうか考える必要があります。大手自動車メーカーの動きによって北九州市内の製造業は大きな影響を受けるでしょう。北九州市で電気自動車をつくらうとする企業に出資して、これを次なる製造業としていこうという機運には大賛成です。

現在、電気自動車の部品のほとんどは中国でつくられています。安定的な供給、サプライチェーンが途切れてしまう可能性に備え、国産で作っておくことが必要です。電気自動車のバッテリーを活用して、住宅と連携することも可能となります。

北九州市には水資源もあるのでダムの稼働を引き上げれば水力発電もあり得るのではないのでしょうか。製造業だけでなく、発電を自分たちでできるような仕組みをどうつくっていくか、電気自動車に必要な電力をどう供給するかも重要です。最終的には、人が住むためのエネルギーを自給できていく必要があると思いますが、北九州市はそれができるまちだと思います。それを一つの産業にしていくのが良いのではないのでしょうか。

「ホッとできる人にやさしいまちに」

東京ではなく、北九州市に本社を置いている大企業があるのは、帰ってきてホッとするまち、一度リセットできるまちであるからではないのでしょうか。これからは特にリタイアする人や子育てする人にやさしいまちになってほしいと思います。

暮らしていて不便がなく、以前より東京との格差は少なくなっているようにも感じます。あとは、子育て世代を呼び込むためにも、教育の中身を充実させて北九州市の学校に来たいと思わせられるような仕掛けが必要でしょう。子育てしやすいまちランキング上位にあっても、きちんと中身が伴うかが重要です。経済界でも新たな学校開設などに向けた後押しができればと考えています。